

二つの世界大戦と日本

～世界情勢と大正デモクラシー～

富山大学人間発達科学部附属中学校 山田 智子

1

はじめに

この単元は、第一次世界大戦前後から戦後の国際協調が進む時期のわが国の動きと世界の動きのあらましを理解させるとともに、民族運動の高まり、国際平和への努力、わが国の国民の政治的自覚の高まりに気づかせることをねらいとしている。

第6章 二つの世界大戦と日本

1節 世界情勢と大正デモクラシー

- ① 第一次世界大戦と総力戦
- ② 日本の参戦と戦争の影響
- ③ 平和を求める声と独立を求める声
- ④ 民衆が選ぶ政党による政治
- ⑤ 都市の発展と社会運動
- ⑥ 大衆の文化・街頭の文化

6章では、以上のように学習し、第一次世界大戦中における日本の立場、その戦争に対する立場が国民にどのような影響を与えたのかを生徒に考えさせたい。

日本は第一次世界大戦中に、中国に対して二十一か条の要求を行ったり、大戦に参加することによって中国での権益を拡大している。また大戦後に組織された国際連盟の常任理事国入りを果たし、国際的地位を確立することができた。しかしその一方で、日本の中国や太平洋地域への進出を抑えようという動きも高まってくる。第一次世界大戦で、世界を巻き込み大きな被害を受ける戦争を経験しながら、

なぜ第二次世界大戦を避けることができなかったのか、その原因や背景には何があったのだろうか、どうすれば戦争を回避することができたのだろうかという視点をもたせ、今後の学習につなげていけるよう、意識を高めたいと考える。

生徒たちは、急速に近代化を進めたわが国の国際的地位の向上と大陸との関係のあらましを、自由民権運動と大日本帝国憲法の制定、日清・日露戦争、条約改正を通して学習してきている。また、第一次世界大戦のあとには、第二次世界大戦が起こり、日本は原爆の被害にあい、敗戦国となった事実は小学校で学習してきている。歴史的事象について、固定された知識ではなく、真実に迫る手立てを学び、さらに歴史的事象から自分たちの生き方や生活に活かしていこうとする態度や力を身につけさせたいと考えている。そこで、第一次世界大戦を通して世界の動きと日本との関係を学ぶなかで、日本にとって、この第一次世界大戦がどんな意味をもつものであったのかを考えさせたい。

2

学習の流れ

(1) 全体計画 (全7時間)

日本が第一次世界大戦に参戦したことは、日本にとってプラスだったのだろうか、それともマイナスだったのだろうか

第1次 (1時間)

第一次世界大戦が起こった理由は何だったのだろうか

第2次（2時間）

第一次世界大戦中の日本は、どのような動きをとっていたのだろうか

第3次（1時間）

第一次世界大戦後の欧米やアジアでは、どのような動きがあったのだろうか

第4次（2時間）

第一次世界大戦後の日本では、どのような動きがあったのだろうか

第5次（1時間）

日本が第一次世界大戦に参戦したことは、日本にとってプラスだったのだろうか、それともマイナスだったのだろうか

単元を貫く課題を設定し、各時間の授業において課題を意識しながら追究していく。第5次で、これまでの学習をふまえて討論する場を設定する。

3

資料活用の技能・表現を意識した授業

（1）この学習における「資料活用の技能・表現」について

ここでは、「日本が第一次世界大戦に参戦したことは、日本にとってプラスだったのか、それともマイナスだったのか」という課題について、討論する活動を取り入れる。討論するためには、まず自分の考えをしっかりとつことが大切になってくる。何をもとに自分の考えを形成し、固めていくのか、自分の考えの根拠となる客観的事実や資料を適切に選択し、活用することが必要となってくる。何を知りたいのか、そのためにはどんな資料が必要なのかをはっきりさせて収集する。何をあわわしているものなのか、その資料からどん

なことがよみとれるのか、ということをしつかりと押さえる。

また、討論する際には、自分の考えを適切に表現することが重要になってくる。相手に伝わるように、なぜそう考えるのか、具体的な資料を提示しながら、資料を根拠として活用し、わかりやすく表現する。

（2）「資料活用の技能・表現」の能力の育成のための手立て

プラス・マイナスと考える根拠となる客観的事実や資料を適切に選択し、活用することができるようにしたいと考え、本時に入る前に、日本が参戦したことについてのメリット・デメリットを資料を見ながら書き出させた。課題についての自分の意見をまとめる際は、何のどの資料から引用したのかを明記することを指示した。また、本時にいたるまでの授業では、内容やねらいに応じて、適宜教科書、資料集の中の資料を活用しながら進めた。

そして、本時では、討論の際に、根拠となる資料を提示することを伝え、教科書の何ページのどの資料から、どんなことがわかるか、ということ全員が確認できるようにする。なかには、適切に活用されていない場合や読み取りが甘い場合もあるので、教師の方で、疑問を投げかけたり、確認したり、指摘したりしながら進めたい。

また課題について、自分なりに判断したことを、表現する力も身につけさせたいと考えている。自分の考えを出し合い、討論する活動を通して、お互いに考えを深め合い、学び合うなかで、多面的・多角的な見方・考え方が身につくものと考えている。

（3）授業の実際

ここでは、第5次について紹介する。

<本時の流れ>

①前時までの確認をする。

②本時の課題を確認する。

- ・活動の意義を伝え、目的をもって話し合いに取り組むよう意識づける。
- ・ワークシートを配布し、自己評価などについての説明をし、観点を明らかにしておく。

③プラスだったかマイナスだったか自分の立場を明確にする。

- ・机をコの字型にして話し合いがしやすい隊形にする

④それぞれの立場から全体で話し合う。

- ・お互いに意見を述べ合ったり、違う意見の者に質問したりし合うことにより、考えを深め合う場とする。
- ・必ず、根拠となる事実や資料を示しながら主観ではなく、客観的事実に基づいて述べるよう助言する。
- ・効果的な資料が取り上げられていない場合は、こちらから提示する。
- ・おさえるべき事項は、補足説明をする。
- ・第一次世界大戦が日本にとってどんな意味をもつものであったのか、自分なりの考えをもてるようにしたい。

⑤話し合う前と意見が変わったかどうかを確認し、その理由を発表する。

- ・自らの学びを明らかにし、お互いの学びを共有する場とする。

⑥討論を終えての自分の考えをワークシートにまとめる。

⑦自己評価をする。

- ・集団思考で深まったことを個に還元する場とし、自己評価をさせることで、自らの学びを振り返らせる。

それぞれの主張する理由のなかで、相反する事象がでてくると、生徒たちは双方でそれ

ぞれの理由と根拠を積極的に主張し、おもしろい展開となる。一方的にいうだけ、いい放しの展開にならないように、教師が問い返したり、ゆさぶりをかけたり等、議論をコーディネートしていくことも必要である。

(4) 生徒の反応

「日本が第一次世界大戦に参戦したことは、日本にとってプラスだったのか、それともマイナスだったのか」という課題について、当初の生徒の意見は、39人中、プラスが14人、マイナスが25人であった。おもな意見として次のようなものがでた。

●プラスの理由（根拠となった資料）

- ・中国での権益を拡大することができたから
(←「バルサイユ条約」)

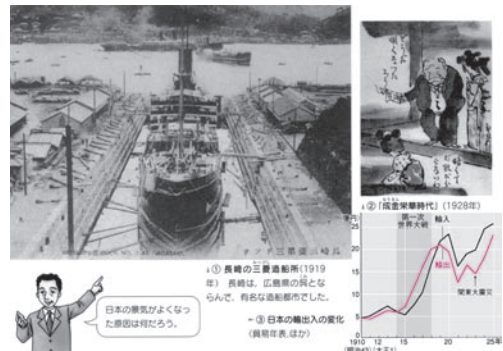


④ 山東省と南滿州鉄道

- ・二十一か条の要求を出すことができたから
(←「二十一か条の要求」)

「中学生の歴史 初訂版」p.188

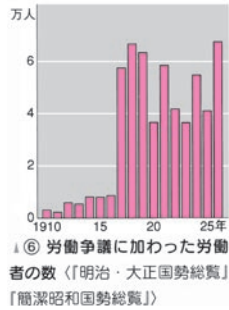
- ・輸出が増加し、好景気につながったから
(←「第一次世界大戦後の貿易額の変化」)



「中学生の歴史 初訂版」p.188

- ・国際的な地位を確立することができたから
- ・国際連盟の常任理事国になったから
(←「国際連盟と軍縮会議」)
- マイナスの理由(根拠となった資料)
- ・好景気は一時的なもので、苦しくなったから
(←「小作人組合と小作争議」)
- ・多くの犠牲者が出たから
(←「死者数のグラフ」)
- ・日本の行動が行き過ぎ、孤立することになったから
(←日英同盟の破棄や国際連盟の脱退)
- ・反日感情が高まることになったから
(←「アジアの民族運動」「国際連盟と軍縮会議」)

年	できごと
1919	パリ講和会議 (ベルサイユ条約) 国際連盟の設立を決定
1921 ~22	ワシントン会議 米・英・日・仏・伊5か国の 主力艦の保有を制限 (米5:英5:日3:仏1.67:伊1.67) 中国の主権尊重・領土保全
1928	紛争解決手段としての戦争を 放棄することを15か国が約束
1930	ロンドン会議 米・英・日の補助艦保有制限 (米10:英10:日7)



④ 軍縮の動き

「中学生の歴史 初訂版」p.190、p.195



五・四運動 「中学生の歴史 初訂版」p.191

「二十一か条の要求を出すことができたから」というプラス側の理由に対して、マイナス側は「それによって、日本は中国だけではなく、他国からも反感を買うことになり、国際的に孤立することになる」「だから軍縮会

議でも日本の軍備が低く押さえられたのだ」など、資料を提示しながら議論を展開していった。

授業後のワークシートをみると、討論する前と後で考えが変わったという生徒は、5人で、マイナスからプラスに変わった生徒が2人、プラス側からマイナス側に変わった生徒が3人だった。

<プラス←マイナス>

- 第一次世界大戦を経験したからこそ、日本の産業の基盤ができ、それによって今の様々な技術の進歩があるのだと思ったから。
- 産業が発展したり、先勝国として世界から注目される国になったりと、自国に利益をもたらすことが多くあった。デメリットとして孤立したり、苦しんだりしたこともあったが、参戦したからこそ今の日本があるのだと思うから。

<マイナス←プラス>

- 一時的には産業発展や領土拡大で、プラスに見えたかもしれないが、後々のことを考えるとマイナスだと思った。自信をつけ過ぎて周りが見えなくなり、第二次世界大戦へとつながっていき、中国だけでなく欧米諸国からも孤立してしまったから。
- 戦争によって好景気になったりしたけど、それは一時的なもので、長い目でみると日本人の意識を甘くさせてしまったと思うから。その甘い意識と他国の反日感情により日本は孤立し、第二次世界大戦へとつながってしまったのだと思う。

<授業を終えての生徒の感想>

- 資料をどう見るかで、意見はとても違ってくると思った。発表を聞いたり、資料を見たりするうちに、「確かにそうだなあ」と思うことが多くあって、意見が微妙に変わった。資料は直接的なことは書いてなくても、見方によって、いろいろなものが見えると思った。
- 大戦中や直後は日本にとっていいことが多かったかもしれないが、先々のことを考えたり、政

府だけでなく民衆のことも考えてみると、デメリットの方が多くあることに気がついた。だけど、必ずしも全て否定できるものでもないので、失敗だったかはわからないが、この大戦やその後の社会の動きから、きっとたくさんのことを学んだと思う。だからそういった面では、プラスだったような気がする。

4

評価

生徒への意識づけのために、授業のはじめに自己評価カードを配布する。自己評価に、「資料をもとに自分の考えをもつことができたか」「自分の考えを根拠を示しながら発表することができたか」という項目を入れ、4段階評価をさせる。観点別の評価として、「資料活用の技能・表現」の評価規準を提示し、どんなことができれば、評価がAになるのかを把握させ、この授業でどんなことを意識して取り組めばよいのかということを確認する。この授業でのねらいや目標を明確にしたうえで、活動に入ることによって、活動への取り組みや内容・成果の面でも違ってくる。

またペーパーテストでは、授業場面を再現するような形のものも出題する。資料は、内容は同じでもなるべく授業で扱わなかったものを使用するとよい。

<問題例>

日本が、第一次世界大戦に参戦したことは、日本にとってプラスだったのか、それともマイナスだったのか。以下の①～⑥の資料から適切なものを用いてメリット・デメリットをそれぞれ2つずつあげなさい。

また、あなたの考えを根拠にもとづいて説明しなさい。【関心・意欲/技能・表現/知識・理解】

資料は、①第一次世界大戦の戦費と被害の表、②三・一独立運動の広がり地図、③労働

争議件数と参加人数のグラフ、④米騒動の絵と新聞記事、⑤第一次世界大戦前後の輸出入のグラフ、⑥日本の大陸進出を示す地図の6つを提示し、自分が根拠として活用するものを選択させるようにする。

5

おわりに

今回のように、プラスかマイナスか価値判断を迫るような学習課題を設定することで、自己決定する必要が生じ、さまざまな資料・材料をもとに深く考えることができる。

何をもって、プラス・マイナスと結論づけるか。立場的（政府・民衆など）・時間的（短期的・長期的）・経済的・政治的・社会的・国際関係的・あるいは当時としての立場や現在の立場でなど、様々な視点から考えることができる。それぞれにメリット・デメリットがあり、一概に決めつけることはできないが、それぞれの要素を挙げ、その根拠となる事象や資料をもとに総合的に考えることによって、どちらかといえばプラス・マイナスという結論が導き出される。その思考の過程が大切であるといえる。また、討論活動を取り入れることにより、解釈や視点について、より多面的・多角的なとらえ方ができるようになるのではないかと考える。討論するなかで、根拠を示すことで、資料の見方・活用の仕方などを学び合っていく。

しかし、戦争を肯定するような方向に行かないよう、他に選択肢はなかったのか、このあとの第二次世界大戦の学習を通して、さらに戦争に対する認識を深め、人間として、何が大切で、何を守っていくべきなのかという価値判断がしっかりできるよう学習を深めていきたい。